

コミュニティ だより

徳島市
徳島市コミュニティ会
連絡協議会

〒770-8571
徳島市幸町2丁目5番地
TEL (088) 621-5510
FAX (088) 621-5511

2011年を迎えて

徳島市長 原 秀 樹



明けましておめでとうございます。

新しい年を穏やかに迎えることと謹んでお慶び申し上げます。

皆さまには、日頃からコミュニティ活動に深いご理解とご尽力を賜り、厚くお礼申し上げます。近年、地方の自主性や自立性を高めようという、地域主権への流れの中で本市におきましても、住民の皆さまに最も身近な基礎自治体として、また、四国東部圏域の中心都市として様々な役割を

果たしていくため、明るい未来の実現に向けた取り組みに全力を傾注しております。

昨年九月には、徳島東部地域の十二市町村の連携により、定住促進を目的とした地域振興策である「定住自立圏構想」の実現に向け、本市が中心的な役割を担うべく「中心地宣言」を行いました。今後は、必要な都市機能の確保や経済基盤の形成など、圏域の活性化と魅力ある地域の形成に取り組んでまいります。また、阿波踊りや徳島LEDアートフェスティバル、とくしま市民遺産の活用など、

徳島ならではの地域資源を活かしたまちの魅力づくりや、総合計画で掲げる「元気たくしま」「安心とくしま」「信頼とくしま」のまちづくりの基本理念に基づき、本市の将来像である『心おどる水都・とくしま』の実現のため、真に必要な施策の推進に積極的に取り組んでまいる所存であります。

こうした施策を円滑に進め

新年のご挨拶

徳島市コミュニティ連絡協議会

会長 島 田 和 男



新年明けましておめでとうございます。

平成二十三年の新春を健やかに迎えられる皆さまに謹んでお祝い申し上げます。早いもので徳島市コミュニティ連絡協議会会長という要

るためには、コミュニティ活動でご活躍の皆様方のご理解とご協力が不可欠と考えております。

今後ともより一層のお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

この一年が皆さま方にとりまして実り多い幸せな年となりますよう心からお祈り申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

コミュニティの振興」などが位置づけられました。このような意味においても責任の重さを痛感しておりますし、これからの会員の皆さま方の温かいご指導をいただきたいと考えています。

また、コミセンに指定管理者制度が導入され五年になろうとしています。利用承諾や維持管理に関する権限が「きちんと」付与され、自主運営が求められています。また市財政が厳しい状況において、われわれ連絡協議会は、お互いに連絡を取り合い、助け合っていく必要を感じています。

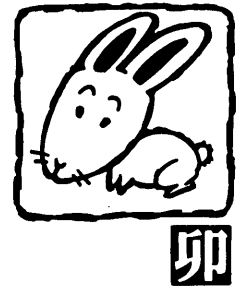
私たちの町は私たちが運営し、私たちが町づくりをしていくという気概を持って本年も頑張ります。

最後になりましたが、会員各位のご健勝とご活躍を心よりお祈り致しまして、新年のご挨拶と致します。



年男年女

所感と抱負



渭北街づくり協議会

会長 岩丸 定

うさぎと亀の童話にあるうさぎは、瞬発力があつて駿足である。一方の亀は、鈍足だが持久力がある。スポーツ選手は、この両方の力が大切です。相手に競り勝つためには、瞬発力が優れていて、息切れしないで粘り強く動ける体力がなければならぬ。年老いても転ばないよう、瞬時に動ける脚力をいつまでも維持したいものです。

先の国会で、柳腰外交が論争されていましたが、柳のようになしなやかで、したたかに対応すると言っていました。「兎も七日なぶれば噛みつく」

ということわざがあります。

一度や二度ばかりにされても相手にしないうさぎのようなおとなしい人でも、度重なれば限度があり、腹を立てるということです。

さて、これからどうあるべきかと、新年にあたり、八十四歳になった年男で未熟老の思いであります。

佐古コミュニティ協議会

会長 小椋ツネ子

私は昭和で最初の丁卯年に生まれました。

「卯年生まれの人はいいやりが深く温かな心の持ち主です。行動はやや受け身で敵を

つくることを好まず奉仕の精神に富んだ人です。慎重過ぎたり消極的にならないことを心がければ素敵な人生を楽しめることでしょう。」

以前こんな文章を読んだことを思い出し、何だか自分のことを言ってくれているような気がしました。消極的な私が戦前戦中を体験しながら成長し、戦後就職、結婚、出産、育児と、人並みの人生が送れたのも私を支えてくれた人々のおかげだと感謝しています。離職後は、婦人会活動のお世話をし、現在はコミュニティ協議会の運営にも参加しています。

今年で七回目の卯年を迎えますが、新年に当たり一層健康に気をつけて、少しでも社会のお役に立てればと思っております。



本年もよろしくお願い致します

- 上八万まちづくり協議会 会長 大下 栄二
- 一宮下町づくり推進協議会 会長 祖川 信明
- 川内まちづくり協議会 会長 中財 達夫
- 川内南コミュニティ協議会 会長 井上兵八郎
- 応神町コミュニティ協議会 会長代行 柏木文俊
- 国府コミュニティ協議会 会長 幸田 勝
- 新町コミュニティ協議会 会長 安田 正勝
- 西富田コミュニティ協議会 会長 中筋 輝
- 東富田コミュニティ協議会 会長 松ノ内 清
- 昭和コミュニティ協議会 会長 勝川 直則
- 渭東コミュニティ協議会 会長 湯浅 義博
- 住吉・城東地区町づくり協議会 会長 芝 正裕
- 渭北街づくり協議会 会長 岩丸 定
- 佐古コミュニティ協議会 会長 小椋ツネ子
- 南井上コミュニティ協議会 会長 堀 良治
- 北井上地区コミュニティ協議会 会長 山田 重政
- 内町まちづくり協議会 会長 山内 鐵士
- 入田町まちづくり協議会 会長 渡邊 浩一
- 上八万コミュニティ連合協議会 会長 松浦 玉男
- 沖洲地区コミュニティ協議会 会長 三栖谷高照
- 津田コミュニティ協議会 会長 島田 和男
- 加茂名まちづくり協議会 会長 原田 治郎
- 加茂コミュニティ協議会 会長 大栗 敏治
- 八万町各種団体連絡協議会 会長 松尾 孜
- 八万中央コミュニティ推進協議会 会長 露口 玲子
- 八万コミュニティ推進協議会 会長 福田 紀雄
- 勝占地区コミュニティ連合会 会長 平井 良明
- 勝占中部コミュニティ協議会 会長 板東 信夫
- 勝占東部コミュニティ協議会 会長 田岡 修蔵
- 多家良地区連合協議会 会長 西占 敏行
- 多家良中央コミュニティ協議会 会長 平岡 幸治
- 多家良コミュニティ協議会 会長 山橋 正和
- 不動コミュニティ協議会 会長 山橋 正和

- 上八万まちづくり協議会 会長 大下 栄二
- 一宮下町づくり推進協議会 会長 祖川 信明
- 川内まちづくり協議会 会長 中財 達夫
- 川内南コミュニティ協議会 会長 井上兵八郎
- 応神町コミュニティ協議会 会長代行 柏木文俊
- 国府コミュニティ協議会 会長 幸田 勝
- 新町コミュニティ協議会 会長 安田 正勝
- 西富田コミュニティ協議会 会長 中筋 輝
- 東富田コミュニティ協議会 会長 松ノ内 清
- 昭和コミュニティ協議会 会長 勝川 直則
- 渭東コミュニティ協議会 会長 湯浅 義博
- 住吉・城東地区町づくり協議会 会長 芝 正裕
- 渭北街づくり協議会 会長 岩丸 定
- 佐古コミュニティ協議会 会長 小椋ツネ子
- 南井上コミュニティ協議会 会長 堀 良治
- 北井上地区コミュニティ協議会 会長 山田 重政
- 内町まちづくり協議会 会長 山内 鐵士
- 入田町まちづくり協議会 会長 渡邊 浩一
- 上八万コミュニティ連合協議会 会長 松浦 玉男

(順不同)



清流への道

袋井を美しくする会

会長 荻野 利明

袋井用水は、一六九二年に楠藤吉左衛門翁により完成された灌漑用水で、二百五十年間に渡り加茂名地区の田畑を順次に潤して参りました。昭和二十八年より県文化財史跡に指定されています。しかし、高度経済成長の頃から都市化が進み、いつからか湧き水も途絶え、生活雑排水が流れ込み、川底にはヘドロが溜まり汚染され悪臭が漂い、魚も住めない水となってしまいました。

①環境整備事業 船や筏を使っての清掃風景

このような用水にどうにかして清流を取り戻せないかと結成されたのが袋井を美しくする会です。船や筏を漕いで、川の中の藻やゴミを取る作業や、用水周辺や、草刈り、ゴミ拾い等を行っています。ヘドロにより臭い汚い、重労働と誰もが嫌がる作業ですが、最近は大勢の若者たちが清掃活動に参加してくれました。「すまんなあ、服や靴がドロドロじゃ、洗っても当分の間、その臭いは消えないよ。」と私が若者に言うのと、「本当に楽しい、また来ます。」との返事が返ってきます。

また、体験学習において小学生九十名に袋井用水の歴史や当会の活動報告を行います。



②加茂名小学校 体験学習 生徒を前に紙芝居をする袋井を美しくする会会長

子供たちが家庭から出る雑排水について、川を汚さないようにするには、どのようにすれば良いかと考えるきっかけになつてもらえばと思ひ、なつちゃんという女の子が夢の中で楠藤吉左衛門翁と出会い、昔の美しかった袋井用水で蛭と

遊び、目が覚めて今の現実を見、自ら川を汚さない方法を学んでいくというお話しの紙芝居をしました。子供たちは真剣に目を輝かせて見、その後、川をきれいにする微生物を全員でまきました。



③環境整備事業 船を使っての清掃活動

（ここ数年より、綺麗な水でなければ住まないという

瑠璃色の川蝉や、水鳥が小魚をついばむ姿が見られるようになりました。「あつ、たくさんさんの亀が甲羅干しをしている。」と川面を眺める子供たちも増え、微力ながら徳島県の偉人が残してくれた尊い財産を皆さま方と一緒に守っていきたくと存じます。



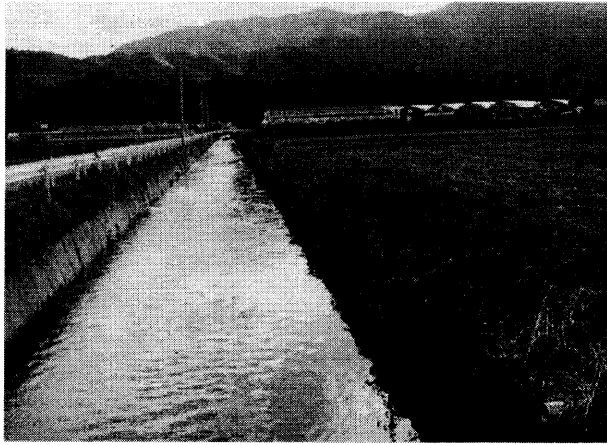
（加茂名まちづくり協議会）

光の雪 窓の蛍

—古代のロマンを今に—

多家良中央コミュニティ協議会

会長 平岡 幸治



幹線排水路

多家良地区は中津峰山麓に広がる田園地帯で、昔は「託羅（たから）の庄」と呼ばれていたようですが、さらにその昔、大化の改新（西暦六四五年）以前は長（なが）の国「宝台」と呼ばれていたようです。

長の国の政庁は那賀郡宝田町にあったというのが通説になっていますが、多家良地区内に多く存在する古墳、出土品からこの地区が長の国の中心であったという説が、昭和

二十九年に発行された多家良村史に記載されています。

この地区は勝浦川、八多川、金谷川に囲まれ、稲作に必要な水利に恵まれ、有史以前から稲作が営まれていたようです。その頃には、きつと初夏になれば水路にホタルが乱舞し、秋には豊かに実った稲穂とともに赤とんぼ舞う風景が見られたことでしょう。そして、母親に連れられた子供たちがホタルを追い、捕まえたホタルの光で、家族団らんの一時を過ごしていたことでしょう。

時移り、昭和が終わる頃には「宝台」周辺は湿地帯故に耕作放棄地があらこちらに見られるようになり、ホタルもいつしか姿を見せなくなっていました。

平成になって、圃場整備事業が完成し、中心部に一条の幹線排水路が造られ、再び豊かな稲作地帯として再生しましたが、ホタルは帰ってきま



親子ホタル鑑賞会

せんでした。

農村の環境保全事業の一環として、宮井小学校のPTAを中心としてこの幹線排水路をホタルの群舞するホタル川にしようという計画が立てられ、ホタルの養殖、放流、そして親子ホタル観賞会が開催されました。これらの活動は平成二十一年度のがんばる徳島農村大賞として知事賞を頂きました。

「蛍雪時代」という月刊誌を知る世代の多くは既に現役を引退し、受験勉強の記憶は

遠い昔に霞んでしまっているでしょうが、母親に連れられてホタルを追った幼少時の記憶はいつまでも鮮明に残っていることでしょう。

赤トンボとホタルを追った思い出が懐かしいのは、もしかしたらこれらは郷土愛とセツトで日本人の遺伝子に組み込まれているのかも知れません。

遠い昔の環境を再現し、往時の暮らしに思いを致す、これは大いなるロマンではないでしょうか。宮井小学校の子供たちによるホタル川つくりの活動はささやかに始まったばかりですが、これが地域ぐるみの活動となり、家族、地域の連帯、コミュニティのシンボルとなるように、そして、再び初夏にはホタルが乱舞し、秋には赤トンボが群れ飛ぶ郷土づくりに声援を送りたいと思います。

子どもたちとのコラボレーション



開館25周年記念事業

北井上地区コミュニティ協議会
会長 山田 重政

最近、町の中に子ども姿が見られなくなつたという声をよく聞きます。当地区の北井上小学校でも一学年一クラスという状況です。しかし寂しいと嘆くばかりでなく、むしろ少子化を逆手にとつた、より細やかな子どもとの触れ合いはできないものでしょうか。当コミュニティ協議会では、地域の子どもと大人の触れ合いコラボレーションを考えてみました。

幸い、当地には徳島市立芝

原児童館があり、子どもたちが群れて遊べる居場所作りを心がけています。このたび、開館二十五周年となるのを期し、記念事業が計画されました。保護者や運営委員の協力を得て、子どもたちの心に残るような楽しい催しにと準備が進められました。



災害用移動炊飯器

年後に配達されるときは、一年生は小学校卒業へと成長していることでしょう。

事業開催に向けた準備を後押しする中で、コミュニティ協議会としても、もつと援助できることはないだろうか、と模索していたところ、タイミングよく日本赤十字社徳島県支部より『災害用移動炊飯器』が贈呈配備されました。早速、防災訓練の一環として炊き出し訓練でカレーライスを作ってみることにしました。

開催当日は、市長も出席の記念式典というこ



カレーライスを食べる子どもたち

から振る舞われる熱々のカレーライスにホッと美味しい笑顔がこぼれていました。その笑顔に誘われるように協力した大人たちにもほほ笑みが浮かびます。

これからも、学校や児童館に積極的に出かけていき、地域ぐるみで子どもたちを見守るといふ姿勢で様々なコラボ活動を工夫していきたいと話合っております。

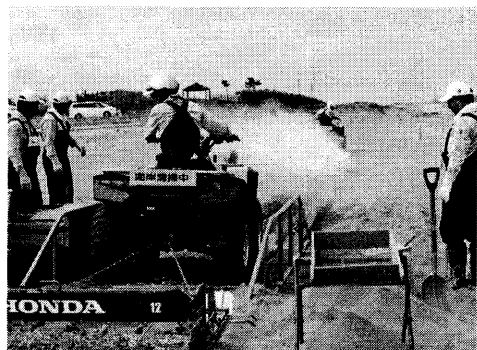


素足で歩ける砂浜を次世代へ...

川内南コミュニティ協議会 会長 井上兵八郎

近年、日本国内の砂浜は次々と失われており、近い将来消滅することが危惧されており、徳島県内の砂浜も例外ではなく、ウミガメの上陸に関する各地の実態調査でも激減の傾向は顕著に表れているように、徳島市内唯一の「海水浴場」開設地である小松海岸一帯でも、ウミガメの上陸、産卵、孵化が確認された平成二十年以降は、上陸が確認されていないようです。

裸足で歩ける砂浜を「次世代へ引継ぎたい」との思いから、美しい地球の自然環境を次世代に引き継いでいくために、世界の各地で様々な環境保全の活動に取り組んでいる「ホンダ技研工業(株)社会活動推進室」にご協力を依頼し、開催条件である「地域」及び「自治体」そして「本田技研



工業」の三者による協働事業として「東部県土整備部」との調整を進め、川内地区青少年健全育成はぐくみの会とともにビーチクリーン大作戦を計画、南北三キロメートルにわたる砂浜が広がる徳島市川内町旭野「小松海岸」一帯で、ウミガメの上陸、孵化が終了するまでの期間を避けた時期に、二日間にわたる徳島県最初となる大掛かりな活動を展開させることができました。

ビーチクリーン大作戦と、同時開催した防災訓練は、共に徳島県青少年育成県民会議の「地域青少年活動活性化事業」の一環としての受託事業です。

川内中学校、川内南小学校及び川内北小学校の児童生徒の皆さん、教職員の方々、保護者の方々など、多くの皆さんのご参加、ご協力を頂く中で、ご家庭、学校そして地域の皆さんが共通のご理解と認識のもと、近づく「東南海・南海地震」を見据え、「たくましく生きる力」を育てるために、自然体験の場を提供させて頂き、企業、自治体、そして地域の皆さんとの協働活動としての「次世代への取り組み」に関して、その第一歩を踏み出すことができました。「僕達の地域を守ってくれ

て、有難うございます。僕たちも、これから頑張ります！」(川内中学校生徒代表)の言

一宮小唄復活について

一宮小唄復活継承委員会
副会長 中畑 英美子



第20回徳島市コミュニティまつり
演芸発表会にて披露

葉を添えてご紹介させていただきます。

ある女性団体が行う凜芸ショーで「一宮小唄」を踊ることになった。七、八年踊っていないので早速練習をしなくてはと、コミセンに貸館をお願いに行った。一宮下町町づくり推進協議会会長さんが「一宮小唄踊るんで。懐かしいな。私が青年団の時、県の代表となり、全国大会が行われた東

京まで踊りに行ったですよ。」と四十数年前を懐かしく話して下さった。婦人会だけで引き継いできたと思っていた「一宮小唄」を、青年団の若い男女も踊っていたのだ。後日、町づくり推進協議会会長さんより話があり、町づくり推進協議会の活動として「一宮小唄」の「復活継承委員会」を立ち上げることになった。継承委員会の会長に佐々木喜和子さん。副会長を踊りの師範、吉田月子さんにお願

いし、早速町民に会の案内をしたところ、五十人ほどの参加希望者が集まった。昼と夜、月二回練習することに。吉田さんの新しい舞台用の振り付けである。

短い練習期間であったが一宮地区敬老会で初めて披露、出席者が懐かしく喜んで下さった。また、当日着用した着物は四十数年前、婦人会の先輩が小学校の校章をろうけつで藍染にし、手縫いした心のこもった着物であることが分かった。

敬老会での踊りをきっかけに町民に広く知られ、会員も増え、昨年十二月までに五、六回の出演依頼がきた。

今後一層練習を重ね、一宮町に「一宮小唄あり」と言われるように会員一同張り切っている。

最後になったが「一宮小唄」の作詞は田村六三郎先生が戦地で故郷を懐かしみ作った詞で、一宮の地名、名所が多く挙げられている。作曲は地元

の教員、木村秀行先生である。「一宮小唄」の歴史を通して町の伝統文化等を学びながら、一宮小唄復活継承委員会が今後大切に引き継いで活動し、発展させていきたいと思う。

昭和地区 “福祉まつり” 開催

昭和コミュニティ協議会
副会長 富田 善明

夏恒例の福祉まつりが、昭和地区の社会福祉協議会主催、コミュニティ協議会、公民館、町内連合会協賛の下、平成二十二年八月五、六日夜、昭和



小学校で、地区内外約九百人の参加を得て、盛大に開催された。

今年度は、「阿波踊りを子供の世代まで盛り上げ、広めよう。」をメインテーマとし、町ぐるみの四十年にも及ぶこの行事に興味ある地域内外の方々の全面的な協力も得られ、テレビ、ラジオ出演でのPRを試みるなど、内容は大きく変わったものとなった。

第一日目、ポスター表彰から始まり、昭和小学校四年生以上に「福祉まつり」のテーマでポスターを募集、百二十名の出品があり、全作品を運動場ボードに展示し、特選

者他二十名を表彰した。

次に、園児、小学生を対象に、「崖の上のポニョ」他、曲に合わせ、楽しく踊った。その直後、いきなりマイケルジャクソン、スパイダーマンのコスプレ登場、場内騒然、大人気であった。続いて、バンド演奏、演歌、ハワイアン、フラダンス等々、暑さを忘れさせる爽やかなひとときであった。また、両日の浴衣まつりでは、希望者に写真撮影をし、後日その写真を無料で送付するコーナーを設け、多数の希望者があった。



第二日目、阿波踊り大会では、まずは、次世代を担う昭

和幼稚園、保育所、小学生の踊り子たち百六十名が、愛らしく登場。鳴り物は小学生四十七人と地域の方々からなる演奏で、「ヤットサー」「ヤット



トヤット」とかわいらしい踊りを披露。次に、おなじみのかがし連(農政事務所)の軽やかな踊り。最後に有名連水玉連八十名の舞台。磨き抜かれた個人技や、息のあった集団演技に酔いしれた。そして、総踊り。会場全体が踊り一色。興奮と感動の渦がさらに大きくなってのフィナーレであった。

今なお、小学校を訪れるたび、その余韻を強く感じる。

名所・旧跡

懐恩の碑

津田コミュニティ協議会 会長 島田和男

津田海岸町の市バス回転場近くに石碑が二基建っている。

この周辺は江戸末期から明治にかけては一面海であった。しかし、潮が引くと大きな洲ができたそう。そこで我々が、子供の頃は海岸に泳ぎに行くのに「まえず（前の洲）」に行くと言っていた。すなわち現在の堤防ができる前の名残りであったと思われる。

明治時代に入り、阿波特産物であった藍が化学染料におされ、阿波藩の表玄関として出荷額の七十%を占めていた津田港は、荷物が急速に減少し、たぐさんの失業者が出た。今のように失業保険もない時代、生活に困窮していた人々を助けるため、廻漕問屋で地主でもあった「島田茂吉」が、県庁に蜂須賀地の干拓地造成の許可申請を提出し、私財を

投入して現在位置に堤防を築いたと言いつたに一日一升失業した人夫に一日一升

のが、明治三十年頃といわれている。

しかし、土地そのものは海



懐恩の碑

(当時は一日生活できた。)の米を与え、「茂吉」自身も先頭にたつて、人夫と一緒に働いた。数年で堤防が完成し、その後、海水を抜き干拓地として人夫に田畑を分け与えた

面下でも阿波藩の殿様であった蜂須賀家の所有であった。そこで約四十年後の昭和十年「島田茂吉」の孫にあたる「郡茂吉」ほか小作人一同が、この土地を譲り受けるため市

自作農創生のためにと、先進的な指導もさることながら、その決断と温情に感謝した小作人たちが、後世に伝えようと昭和十一年十一月に建立した碑である。

坪)の土地を小作人のために破格の価格で譲り受けることができた。さらに雑種地二十一町歩余りは無償贈与を受けることができた。そのときの蜂須賀家側の執事で交渉人の「青木磐雄翁」が対応してくれた。

農業経済のため、

当局に陳情に行ったり、代表者が上京して直接蜂須賀家に懇願したりした結果、
田↓七町四畝
畑↓二十町十七畝五十歩
原野↓二十町歩
宅地↓八百八十坪
雑種地↓二十一町三十五畝
は公園にする約束

合わせて五十町歩(十五万

徳島集後記

新年おめでとうございます。新しい年は夢と希望に満ちた年であることを祈っております。

新しい年には、徳島の生んだ偉人長井長義の伝記映画が完成します。芳川顕正らとともに、歩いて長崎の出島へ留学します。長義の下宿には伊藤博文、大久保利通、坂本龍馬たちがやってきて論談を交わしていました。彼らこそ明治の日本をつくっていきました。

人を育てることが、いかに大切かを物語っています。

新年号は、市長さんの提言にあるように「魅力ある地域の形成に取り組む」ことの大切さを言われています。

楠藤吉左衛門と袋井用水、多家良の古墳群と古代長の国の中心「宝台」、川内の江戸の先人荒井武兵衛親子の作った小松海岸、津田海岸の築堤と干拓をした回漕問屋島田茂吉とそれを守ろうとする地域の努力の記事は、新年にふさわしいものです。

これらは、地域の心豊かな歴史であり宝として再認識していかなければなりません。

(佐藤義忠 記)